



TITLE:

<朽木フィールドステーション>もう一つのプロジェクト: 滋賀県余呉における関わり

AUTHOR(S):

増田, 和也

CITATION:

増田, 和也. <朽木フィールドステーション>もう一つのプロジェクト: 滋賀県余呉における関わり. 実践型地域研究最終報告書: ざいちのち 2012: 99-112

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/155063>

RIGHT:

もう一つのプロジェクト —滋賀県余呉における関わりの広がり—

朽木 FS 増田 和也

はじめに

朽木フィールドステーションの取り組みの中で大きな柱となっているのは、焼畑を活かした「くらしの森」づくりである。それを実際に試みようとする中、私たちは縁あって滋賀県余呉町（現：長浜市余呉町）の二つの地区（中河内および赤子山、図1）で焼畑の取り組みを始めることができた。一方で、焼畑を軸にした取り組みを進める過程で地域との関わりは広がり、焼畑とは別に始まったことがある。それは私自身にとっては非常に大きなかたちで展開しながら、現在に至っている。焼畑に関する取り組みについては別のメンバーによる報告で述べられているので、ここでは余呉におけるもう一つの取り組みについて取り上げる。

焼畑とは関係のない取り組みは、朽木 FS の計画からやや外れたことであり、副次的な展開である。しかし、ここでこれを取り上げるのは、次のような理由で興味深いからである。第一は、現在の私は、朽木 FS の主たるプロジェクトが直接に対象とする中河内や赤子山の現場よりも、この取り組みの方により足繁く通っている状況にあり、当該地域との関わりが深まっていく中で、多くのことに気づき、学ばされてきているからである。第二に、焼畑をめぐる取り組みとこの取り組みでは、我々（朽木 FS メンバー）と地域との関わり方が対照的であり、両者を比較することで実践型地域研究のアプローチを考える上で重要な視点を提示できると考えられるからである。前者は我々の中で描いた構想を地域の協力のもとで実施しているのに対し、後者は我々にとっては思いもかけないかたちで始まったものである。つまり、我々の側、とりわけ私自身には、初めから明確かつ具体的な計画があったわけではなく、漠然とした目標に向かって地域と関わる中で方策を模索しているものである。このように、両者の地域社会へのアプローチはまったく異なり、対照的であるといえる。

以下では、焼畑とは関連のない取り組みについて、その経緯と展開の過程を記述する。そして、最後に焼畑を軸とする取り組みと比較しながら、地域と外部者との関わりのあり方とその可能性について考えてみたい。

1. 関わりの始まり

1.1 摺墨集落との出会い

余呉で焼畑とは関連のない取り組みが始まったのは、次のような紆余曲折からである¹。私はこれまで、おもにインドネシアの森林地域に位置する村落を対象として現地社会の変容について調べてきた。現地では森林開発が進んでいたものの、焼畑を拓く世帯がわずかにあった。そして、調査を進める中で気づくようになったのは、現地社会において焼畑はたんなる食料生産のための生業ではなく、在来の知識や技術、慣習や信仰、村落内部の社会関係といった社会や文化のさまざまな側面と結びついていると

¹ 一連の経緯については本プロジェクトの中間報告書における拙稿[増田 2010]に詳しく述べた。

いうことであり、次第に私は焼畑といういとなみに惹き込まれていくようになった。

帰国後、私は、日本でも 1960 年代まで広い地域で焼畑が行われていたこと、今でも一部の地域で焼畑がなされていることを知った。そして、京都で焼畑あるいは林野への火入れに関心をもつ市民グループと出会い、私もその仲間に加わるようになった。この集まりはやがて「火野山ひろば」と名付けられ、今日にいたっている。そのメンバーの一人が、余呉で今でも焼畑を続けている方がいる、ということを知りつけて、その方に連絡をとった。その方が永井邦太郎氏であった。それまで永井氏は余呉町内の数カ所で焼畑を拓いてきたが、2007 年か

らは町内でも最北に位置する中河内という集落の一角で焼畑を拓いていた。こうして、私をふくめ、火野山ひろばのメンバーは永井氏の焼畑を訪れるために中河内に訪れるようになった。このように我々の余呉との関わりは中河内から始まった。

一方、永井氏が居住するのは、中河内ではなく、摺墨（するすみ）集落である²。しかし、焼畑は中河内に拓かれていたために、我々は中河内を訪れることはあっても、摺墨とはしばらく縁がなかった。我々の摺墨との関わりは、次のように始まる。

2008 年、火野山ひろばの取り組みは京都大学による本プロジェクトと連携するようになった。そこで我々は、焼畑を地域づくりと荒廃した森林の再生のための手段として位置づけ、自分たちで焼畑を拓きながら実践的研究を進める方針をたてた。そして翌 2009 年、我々は永井氏に指導を仰ぎながら焼畑耕作を始めることになり、永井さんの紹介で耕作候補地を菅並集落の区有林に定めた。林野に火を入れるというのは、地域からの理解と協力があって実現できるものである。その年の 4 月、我々は耕作を始めるに際して、地域の方々との顔合わせをすることになった。その場には私たちが焼畑を拓く予定でいた菅並の方々に加えて、摺墨からも壮年層の 3 人が参加されていた。この 3 人組が、以後、私たちと交流を深めていくことになる方々であった。永井氏は、焼畑を進める上でいずれこの 3 人にもお世話になることがあるかもしれない、という意図から、この 3 人をその場に招いたようであった。焼畑に関する話し合いの最中、3 人組の表情は始終堅く、自己紹介のほかは一言も発言されなかった。しかし、そのような 3 人組もその後の懇親会では打って変わり、何とも陽気で賑やかに話しかけてこられた。そしてその場で、我々は 3 人組より摺墨での田植えに誘われた。これが我々と摺墨とのおつきあいのきっかけとなったのである。

1.2 摺墨集落の概況

余呉町は滋賀県の北東部に位置し、山を隔てて岐阜県あるいは福井県と隣接している。2011 年 1 月、余呉町は長浜市と合併して現在の行政区分を形成している。余呉町内の東側には高時川の流れて

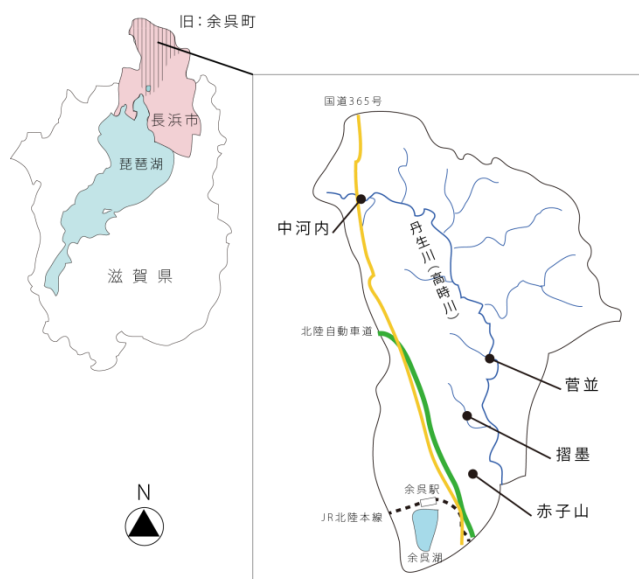


図 1 余呉で関わった地区の位置

² 行政の上では「するすみ」と表記されているが、現地の方は「するみ」と略してよぶことが多い。

集落が点在する。摺墨集落は高時川の支流の一つである摺墨川の谷間に位置する。明治 10 年代から 20 年代にかけては 33 戸で構成されていたようだが（小牧；宮畑 1957：162）、1980 年代末には 20 戸と減少し（余呉町教育委員会；建設省高時川ダム工事事務所 1991：345-346）、2011 年 10 月時点での戸数は 14 である。このうち在所の外に住居をもち、週末や在所の行事がある時のみ在所に戻ってくる世帯もあり、14 戸のうち実際に摺墨に居住しているのは 9 戸である。

集落域は摺墨川の上流域一帯であり、その中央部に家屋が集まり、上方部と下方部に水田が広がる。とくに上方部は谷間が開けて日照時間もよいために、住民によると摺墨の一等田が位置するという。稲作が主たる生業であるが、1960 年代までは炭焼きと養蚕が重要な現金収入源であった。現在、ほぼ全ての世帯は兼業農家である。1960 年代までは、集落に流れ込む沢筋に沿って棚田が形成されていたが、現在は杉が植えられ、薄暗い林に囲まれている。

なお、この地域では集落のことを在所あるいはムラとよぶ。以下では文脈に応じて、集落を在所あるいはムラと表現する場合もあるが、原則として、いずれも同じ対象を意味する。

2. 関わりの深まり

2.1 在所からの宿題

このように、我々と摺墨集落との出会いは思いがけないかたちで始まった。とはいえ、我々のプロジェクトの主題は焼畑であり、当初、我々の中で、摺墨との交流は地域との良好な関係づくりの一つとして位置づけられていたにすぎなかった。その一方で、私と摺墨との関わりは次第に深まっていくことになったのである。

2009 年 5 月初旬、我々は摺墨 3 人組の誘いを受けて田植えに出かけた。そして、大歓迎を受け、我々は 9 月下旬の稲刈りに続いて、年末にも忘年会と称して摺墨を訪れた。このようにして、その年の摺墨とのつきあいは終わった。翌 2010 年 4 月、ふたたび田植えの季節が巡ってきた。私は摺墨に連絡を入れることになっていたものの、それを逡巡していた。というのも、田植えの頃は農家にとって多忙な時期である。そのような時に、田植えの戦力にはとうていならない我々がお邪魔するのは、在所に負担を増やすことになるのではないか、という思いがあったからであった。その一方で、せっかく生まれてきた関係をこのまま終わらせてしまうことも先方に対して失礼ではないか、とも思われた。結局、他のメンバーと相談した後、ふたたび田植えにお邪魔したいことを 3 人組に伝えた。

すると、田植えのことは快諾されたのであるが、思いがけない言葉が返ってきた。「摺墨に 1 年間来てみて、少しは摺墨のことがわかったやろ。それでや。今度は田植えの他にも何か新しいことを始めたいんや」というのであった。咄嗟のことであり、私はその場で具体的なアイデアが浮かばずにいると、急ぐわけではないが、何か在所の活性化につながるようなことを考えてほしいということを話された。結局、「何か」についてはあらためて相談することにして、田植えの日程を調整して電話を切った。さっそく私は、プロジェクト全体のとりまとめを担当する鈴木玲治助教（当時）を含め、その他のメンバーにこのことを伝えた。一同の中からは、前向きな意見が出る一方で、不安の声も上がった。それまで摺墨を 3 度も訪問しているとはいえ、いずれの滞在も短いもので、それだけで在所の様子がわかるはずもない。具体的な妙案が浮かぶこともないままに田植えの日を迎え、我々は摺墨に向かうことになった。

田植えは作業に忙しかった上に世間話が弾んでしまい、新しい取り組みのことについての相談は進展しなかった。しかし、私は在所から宿題を与えられたような気になり、その後も頭の片隅にこのことが

引っかかっていた。在所からの投げかけにどう応えればよいのか。6月下旬、私と鈴木氏は、3人組の一人で京都に勤めている松永昭男氏と会い、率直に意見交換をすることにした。その場で松永氏が話したことは次のようなことであった。「在所で何か新しいことをやろうという声が上がっても、誰も反対はしない。けれども、積極的に協力するというわけでもない。それで、いつの間にか話は立ち消えになっていく」「在所の内から何か新しいことを始めるのは難しい。ただ、外から何か提案してもらおうと、それには村の人も『仕方ない』と言いながらも、やってくれる。外から引っ張ってほしい」。このままでは在所は何も変わらない。そこで、何かを始めたいが、外部との関わりがあると在所は動き出すであろう——これが松永氏のおおよその考えであった。松永氏の話を伺いながら、在所の気質が少しずつ理解できたものの、具体的に何を始めればよいのか、我々はやはり見当がつかなかった。

2.2 現状を整理する

そのような中、鈴木氏があるアイディアをもってきた。それは、在所の方々とともに摺墨の現状や現在抱える問題点を整理し、それを皆で共有することで新しい取り組みを考えようというもので、その手法としてKJ法の活用を提案してきた。KJ法とは、文化人類学者の川喜田二郎がデータ整理を目的に考案した方法である。データをカード上に、原則1枚につき1項目のデータを書き出した後、そのカード群を何がしかの括りで類別化し、さらに構造化していく。その過程で、雑然としていた項目の数々の中に関連性や因果関係といった筋道が見えるようになり、問題解決の手順や新たな方策を生み出す際の手がかりとなる、というものである[川喜田 1967]。また、この方法をグループで行う場合に期待できるのは、参加者が一連の作業を通じて能動的に問題に向き合うようになり、参加者自身の中に気づきを導くとともに、問題や意識の共有を促す、という点である³。私もこれに賛同し、さっそくこれを実行しようと、摺墨3人組に連絡をとった。

田んぼの作業も一息ついた7月初旬、我々二人は摺墨に向かい、集会所でこの作業を試みた。この時は3人組に加えて、在所の営農組合長も集まってくださった。我々は4人に趣旨を説明し、「現在の摺墨で問題と思われること」について書いていただくようお願いした。4人とも最初は怪訝そうな顔をされていたものの、それでも計40枚あまりのカードが集まった。計画では、出そろったカードを皆で類別化していく作業に移ることになっていた。しかし、この日の集まりは4人の都合により午後6時過ぎに始まったため、夕食の時間帯と重なってしまった。書き出し作業は飲食の前にお願ひできたものの、その後の作業を空腹のまま継続することは難しいであろうと思われた。このため、我々が書き込まれたカードの整理をし、その結果を4人に提示して意見をもらおう、ということになった。

この方法の特徴は、出された項目を皆で整理・分析するプロセスにある。このように、この試みは中途半端なたちで終わってしまったものの、それでも在所の方々の思いが以前よりも具体的に把握できた。この時4人が書き出した項目の一部を、我々の方でいくつかのカテゴリーで括りながら整理したのが表1である。そこで指摘されたことのいくつかをみてみよう。

まず挙げられたのは後継者問題である。それは、多くの土地や植林地が荒廃した状態だけでなく、各戸のもつ山林の境界が不明瞭な状況をも招いている。次は、日常生活において時間のゆとりがないという点である。これは農業の兼業化によるもので、「日曜日は百姓をするためにある」「自分のことで精一杯で、ムラのことを考える意見はない」といったように、現状を変えるための新しい取り組みを考える

³ 同様の方法は、参加型農村開発の場においても、対象社会の状況と人々のニーズを比較的短期間で把握するための手法のひとつとして用いられている。

表 1. 「現在の在所で問題になっていること」についての返答例

カテゴリー	書き込まれた内容
後継者問題	<p>世継人がいない家がたくさんある。</p> <p>摺墨に最後まで残る人は誰？</p> <p>自分たちの代が終わったら、終わりだ。</p> <p>荒れた土地や山がたくさんある</p> <p>自分の財産（おもに山林）の境がわからない。</p>
時間の余裕不足	<p>昔は専業、今は兼業。</p> <p>日曜日は百姓するためにある。</p> <p>自分のことで精一杯で、ムラのことを考える意見はない。</p> <p>土日はムラの作業。人数少なく、労力不足。</p>
経済的側面	<p>田んぼをつくってもお金にはならない。（市販のものと）同じ米をつくっても手間は3倍。</p> <p>ムラの仕事では損もなければ得もない。</p> <p>産業（農業）としての基盤がない。</p> <p>お金になることなら一歩進める。お金にならないことは進まない。</p> <p>お金を稼ぐのが先。</p> <p>収入となるのであれば、参加できる。</p>
補助金の問題	<p>行政からのサポートや助成があっても、それを活かす人がいない。</p> <p>補助金を有効に利用できる組織を明確にする。</p> <p>予算消化の補助金では結局、ムラの負担が増えるだけ。</p> <p>補助金でムラが成立するのは無理。</p> <p>補助金を当てにしているのはダメ。自分で何かを考えないとダメ。</p>
人びとの気質	<p>共同作業は一生懸命にやる。</p> <p>協同で何かをしたことがない（自治活動は別にして）。</p> <p>個性豊かである。</p> <p>ムラの一致した意見はない。</p> <p>最初の2-3年は先頭者が出れば、後から付いてくるのでは。</p> <p>プライベートで始めて、一人二人と増やしていく。</p>
獣害	<p>サル・イノシシ</p> <p>イノシシ対策にお金がかかる。</p>
自然条件	<p>冬期に雪が多い。</p>

註)「カテゴリー」の分類は筆者および鈴木による。

() 内はインフォーマントによる補足。

余裕がないことが窺える。三つ目は、行政からの補助金制度についてのものである。現状では、行政からのサポートや助成があっても、それを受け入れる個人や組織が不在あるいは明確でないために上手く活用できていない場合があるだけでなく、補助金によっては、かえってムラの負担を増やす場合があることが指摘され、行政と地域のそれぞれの思惑が上手くかみ合っていないことがわかってきた。また、

在所の気質についても言及があった。在所の人々は自治会の共同作業を一生懸命にやるものの、それ以外には共同で何かをしたことがないという。これは、ムラの人びとは「個性豊か」であり、在所の中で一致した意見がないためであり、まずは「プライベートで始めて、一人二人と（賛同者を）増やしていく」のがよい、という。

このように、人手不足のために現状を維持するだけでも手一杯である様子が窺える。焼畑の現場に3人組が顔を出されることはなかったが、これは在所内の農作業をこなすだけで限界であるからにちがいはなかった。そのような状況の中で新しいことを提案しても、それは行政の補助金について言及されていたように、在所に新たな負担を増やす結果になるのではないか。それでは、在所の負担をかけないかたちでの取り組みはないだろうか。私の中では、そのような問いだけが浮かぶばかりで、妙案が浮かんでくるわけではなかった。

2.3 とにかく通う

このように在所が抱える問題点について整理してみたものの、それだけで在所のことが理解できるわけではない。やはり、少しでも在所の様子を窺いながら、そこから自分なりの視点で考えていくしかないだろう。そのように考えるようになって以来、私は機会あるごとに摺墨を訪れることにした。

KJ法を用いた試みから数週間後、中河内の現場で焼畑耕作に向けての林野伐開の作業があった。私はこの作業の帰路、一人で摺墨に向かった。その翌日には在所の共同作業が行われる予定であり、私もこれにお邪魔させてもらった。共同作業の場合は、在所の方々にお会いすることができる絶好の機会である。

摺墨では、共同作業のことをニンソク（人足）という。

この日の作業では、まず朝方に川の掃除を終え、その後には水田の周囲に獣害防止の電気柵を設置した。昼過ぎには作業も終わり、集会所では簡単な慰労会がなされ、私はその場にも寄せていただいた。

同じ頃、我々が新しい取り組みの案を示すことができない中、松永氏は「まずは」とソバの栽培を提案した。ソバ栽培は手間が比較的かからないだけでなく、摺墨の営農組合長の身内がソバ打ちの道具一式をもっているの、収穫後も何やら楽しめるのではないかと、いうのであった。我々も他にこれといった具体案があるわけではないので、ひとまずソバ栽培を始めることで話しはまとまった。そして、8月最初の週末、私は摺墨に向かい、松永氏とともに耕地を整えた後にソバ種を蒔いた。

焼畑の現場では8月下旬に火入れをおこなったが、その後も発芽したカブラを間引いたり、焼畑の周囲に獣害よけの電柵を設置したりと作業が続く。私は、こうした焼畑での作業の折に、できるだけ摺墨に立ち寄るようにした。しかし、ソバの様子が気になり、私は焼畑の現場での作業がなくとも、摺墨に向かうこともあった。10月も半ばとなり、ソバの白い花が咲く中



写真1 集落内の畑で始めたソバ栽培



写真2 新年のオコナイ。餅を神社に奉納した後、直会の場へ戻る

で、そろそろ収穫のことが頭をよぎるようになった。そのような頃、ある晩、ソバは何ものかによって無惨に踏み倒されてしまった。どうやらイノシシが畑に侵入し、ソバを食べるでもなく、畑の中を駆け廻っていったようであった。結局、この年はソバを収穫することはできなかった。しかし、肩を落としながらも、気を取り直して3人組と杯を交わした。

また、農作業以外の機会にも在所にお邪魔した。たとえば、11月最終日曜日に集落内の神社でおこなわれる新嘗祭や、新年3日のオコナイの機会である。新年3日のオコナイの機会である。オコナイは、各戸の代表が一同で餅を突いた後、餅を神社に奉納するという神事である。オコナイに各戸から集まる者は紋付袴という出で立ちであり、その場に女性は参加することができないほどの厳格な行事であったが、区長さんの計らいで承諾をいただき、後方からその様子を見学させていただいた。こうして少しずつ在所の方々の氏名や顔が把握できるようになった。

2011年5月、我々は摺墨へ3回目の田植えに出かけた。6月に在所に顔を出すと、灌漑用水の修繕作業の場に出くわし、稲作にまつわる様々な作業の様子を少しずつ目にできるようになった。このころになると、我々が手植えをした水田を含めて、稲はすくすくと生長しており、在所を訪れる度に稲の生長具合を見るのが楽しみになっていた。そうして8月も終わりに近づき、もう半月も経てば稲は収穫を迎える頃となった。しかし、2011年9月の前半には近畿地方を立て続けに台風が襲った。余呉は台風の直撃を受けたわけではなかったが、大雨と強風で稲は倒れ、河川から溢れた水が水田に入り込んだ。ぬかるんだ田にはコンバインを入れることができず、手刈りをせざるを得ない。だが、稲が倒れて田にたまり込んだ水に浸かると、稲藁は腐り始め、手刈りであっても刈り取りが困難になる。また、すっかりと熟した稲穂が水に浸かると発芽してしまう、稲の味は一気に低下してしまう。このため、一刻も早く刈り取りをしなくてはならない。こうした気象条件のために、刈り取りに向けたスケジュール



写真3 3年目に入った田植え



写真5 自分の手で植えた稲の生長が気になり、在所への訪問を重ねた



写真5 台風によって稲が倒された上に、水浸しとなった水田

が大きく乱れることになった。

こうした中、私は週末ごとに摺墨に向かった。これは、コンバインでの刈り取りが困難となった状況下では、少しでも手刈りの要員が増えることが望ましいことを3人組から伺っていたからでもある。しかし、私は何より自分で植えた稲を刈り取ってみたいと思ったし、このような緊急時に在所の方々がどのように対応するのかということを実際に見てみたかった。また、松永氏はふたたびソバを蒔いていたが、前年の反省から今度は獣害よけの電柵を設置しようと話し合っていた。ソバ栽培は松永氏と私たちとの関わりの中で始まったことであり、この作業を松永氏だけに任すわけにはいかない。私は10月初旬からインドネシアに渡ることになっており、それまでに電柵設置を終えたいと考えていた。しかし、このような状況では稲刈りを終えることが優先事項であり、ソバ栽培のための作業は後回しにせざるをえない。つまり、ソバ畑の電柵張りに取りかかるためには、まず稲刈りを終えなくてはならない。なんとか稲刈りは9月最後の週末に終わり、その折に電柵張りをも終えることができた。

3. 在所の自律性

3.1 生み出される在所の一体性

以上のように、私は在所からの投げかけに何とか応えるために、新しい取り組みにむけた手がかりをつかもうと在所に何度も足を運んだ。しかしながら、在所を訪れるにつれ、在所は私が横から軽々しく口を挟むことができるような存在ではないように思えてきた。というのも、在所への訪問を重ねるにつれて、3人組をはじめとする人々が在所を維持し支えるために、様々な工夫や試みを重ねている様子が見えてくるようになったからである。

余裕がないことが窺える。三つ目は、行政からの補助金制度についてのものである。現状では、行政からのサポートや助成があっても、それを受け入れる個人や組織が不在あるいは明確でないために上手く活用できていない場合があるだけでなく、補助金によっては、かえってムラの負担を増やす場合があることが指摘され、行政と地域のそれぞれの思惑が上手くかみ合っていないことがわかってきた。その一例は、農事に関する組織の再編成である。2010年7月下旬、ニンソク場で区長さんは次のようなことを言った。「川掃除は、どうもお疲れさまでした。ここまでは自治会のニンソクでしたが、ここからは営農の作業となります」。営農とは営農組合のことである。これを聞いた時、私はなぜここで作業の中締めをするのか、その意味が飲み込めなかった。私は、ニンソクというのは在所の構成世帯が一体となって、あらゆる分野の作業を担うものであると想像していた。しかし、後日、このことを3人組に尋ねると、そうではないことがわかった。ニンソクは、自治会（集落）・営農組合・神社・寺社の大きく4つの分野に分かれ、道ニンソクや川ニンソクは自治会、灌漑水路や電柵設置は営農組合がそれぞれ主催し、参加が求められるメンバーは必ずしも一致するわけではない。そのために旧来、それぞれのニンソクは日にちを違えておこなっていたが、2009年から同一



写真 6 川に作られた取水口であるユ。肥料袋などに砂利を入れた土嚢を積んで堰をつくる

の日に異なるニンソクを組み合わせることになったのだという。というのも、高齢化が進むにつれ、最近では村外に転出した子ども世代が高齢の親の代わりにニンソクに出ることが少なくない。こうした状況に合わせて、ニンソクの作業は減らさないまま、在所に集まる回数を減らすべく、異なるニンソクを同じ日に重ねるようになったのである。

同様のことは、灌漑水路の共同作業にも当てはまる。灌漑用の水は集落に流れ込むいくつかの沢を水源としており、沢の流れに石や土嚢などを組んで堰をつくり、そこから灌漑水路に水を取り込む。このような取水口をユといい、ユを整えることをユタテという。春先の田仕事の始まりに合わせてユタテをするが、その後も大雨の後などにはユの修繕や整備が必要となる。ある時、私はユの整備作業にお邪魔したことがあったが、私はこの作業も在所の各戸が参加するニンソクと思っていた。しかし、聞けば、ユを在所の全戸で管理するようになったのも、2009年からのことであるという。上述のように、摺墨の水田は家屋の並ぶ居住域の上方と下方に分かれて広がる。上方部と下方部の双方に田を持つ家も少なくはないが、どちらかだけに田を持つ家もある。在所には計5カ所のユがあり、以前は各ユの管理はそれぞれから水を引く田の所有者が担っていた。つまり、一つのユから引かれた水のみを利用する者はそのユだけを管理すればよく、2カ所のユに依存する者は当該2カ所の管理に携わるようになっていた。しかし、現在では全戸が5カ所の全てのユの作業に関わるようになった。

このようにユの管理の仕方が変化したのは、集落協定事業への参加が契機となっている。これは、正式には「中山間地域等直接支払事業」といい、集落内で現在耕作している耕地を5年間は放棄しないという協定のもとで、集落に補助金が下りるというものである。この参加には集落内全戸の賛同が必要であり、協定期間内に一戸でも耕作を断念すると事業規約に反することとなり、補助金を返還しなくてはならない。つまり、耕地を世帯単位で維持するのではなく、在所が一体となり耕作地が一枚でも放棄されないように努めることが求められる。こうした流れの中で、摺墨ではユの管理を集落単位でおこなうように変更したのであった。

日本の農村社会において農業経営の単位は各戸であり、集落がその中心として機能することは永らくなかった。しかし、集落営農は、生産の合理性を目的として2000年以降から政策として強く推進されてきた[末原 2011]。今日の摺墨では、集落を単位とする一体性が別の場面でも新しく生まれており、電柵の管理もその一つである。近年はサルやイノシシによる農作物への食害がひどいため、稲が出穂期を迎えると、集落内の水田群のうち、隣接する水田を一つのブロックとして区切り、それぞれのブロックを電柵で大きく囲う。しかし、電柵というのは、ひとたび張ればよいというものではない。電柵を張った後に大切となるのは草刈りである。というのも、草や蔓が電柵に触れると、それらを通じて漏電してしまうため、電柵の効果を低下させないよう、夏の日差しの下で旺盛に伸びる蔓草をこまめに除く作業が欠かせない。摺墨では複数枚の田をまとめて電柵で囲っており、ここでも在所が一体となるような集団性が生まれることになる。

このように、今日においては新しいかたちで在所の一体性が求められている。とはいえ、それを保つには心もとない状況にあるのも事実である。たとえば、畦の草刈りは各耕作者がそれぞれの田を世話す



写真7 摺墨3人組とともに

ることになっている。しかし、電柵に蔓草が触れると電柵全体の効果が低下してしまうように、個々人による世話が十分でない場合には、在所の一体性にほころびが生まれることになる。高齢化は摺墨でも例外ではない上に、住居を集落外に移している人もおり、日常的な田の守りが徹底できないことがある。こうした問題は集落協定の維持にも関係してくる。現在は高齢者が耕作している田が、数年後も同様に耕作されているかどうかは不明だからである。

こうした中で、在所の一体性を維持するために中心的に身を動かしているのが壮年層の3人組である。3人組は、毎週末、草刈り機を下げて集落内の水田一帯を廻り、他の人の田であっても電柵付近の草をさっと刈っていく。また、耕作が困難な世帯の田については、委託のかたちで耕作を継続させている。耕作委託は個人で引き受けることもできるが、個人では負担が大きすぎることもある。そこで受入に向けての体制を整えようと、3人組は組織を結成した。その名も「Do(ドゥ)いなか」である。「洒落た名前ですね」と言うのと、「『ど・いなか』ということや」と3人組は冗談まじりに笑う。このようなユーモラスなセンスを交えて、在所を支えるしくみは組み替えられながら持続しているのである。

そのような組織の再編成は、農林業の低迷・兼業化・人口減少・高齢化といった社会状況の変化の中で、必要に迫られて導かれてきたことであるかもしれない。しかしながら、在所の個別の状況に合う対応の仕方を選択し、それを実行してきたのは、他でもなく在所の人々である。在所を取り囲む状況は必ずしも明るいとはいえないかもしれないが、それでも在所の自律性は息づいている。農山村の暮らしは自然との関わりが大きいだけに人々の共同は欠かせないが、今日、在所の一体性がもつ意味合いはますます重要となっている。「ユ」や電柵の設置・撤収など単発的な作業はニンソクによっておこなわれ、共同作業が生み出す力は大きい。その一方で、在所の一体性が個々人の心配りやアイディアによっても支えられているということにあらためて気がつく。そして、そのような在所の姿が目に入るようになるにつれ、私のような外部者が在所に対して軽々しく口を挟むのはおこがましいことのように思えてくるのであった。

3.2 新たな始まり

しかし、私の度重なる訪問が在所に対してまったく意味をもたないものだったとも思えない。そのように思えるのは、わずかながらも我々のメンバーが在所を訪れるようになってから始まったことがあるからだ。

すでに述べたように、その一つがソバ栽培の試みである。ソバ栽培は松永氏と我々との関わりの中でまとまってきたことであり、我々という外部者が関わることで、ソバ栽培という新しい取り組みを始めやすい雰囲気生まれたのかもしれない。また、すでに述べたように、1年目のソバは獣害のために収穫ができなかった。ある時、私が松永氏に次のシーズンもソバを作るのかどうか尋ねると、3人組の一人である山内弘一氏は獣害のことを持ち出して「もう止めとけよ」と言ったことがある。ソバ栽培は無謀な試みとして受け取られているのだろうか、この時の私はとらえた。しかし、必ずしもそういうわけではないようであった。2年目のソバ栽培で畑の周囲に電柵を張った後のこと、3人組と何気ない会話を交わしていると、ふとソバ栽培のことが話題に



写真8 関わりを重ねる

なった。その時、以前にはソバ栽培を制止した山内氏がこう言った。「ソバを練ってなあ、それをワサビ醤油で食べるのは、そりゃ絶品や。(ソバが収穫できたら) こいつが山から天然ワサビを採ってくるよ」と、隣のもう一人を指しながら、まるでソバの収穫が楽しみであるかのように話してくれた。

2009年9月、稲刈りの途中で手を休めて一息ついていた時、「こんな土手の斜面でも焼畑はできんのか」と山内氏がふと尋かけてきたことがある。私は山形県のある地域で田畑の畦を焼いてカブラを作っている様子を書物で読んだことがあったので、そのことを伝えた。すると「中河内では山を切って焼畑にしとるようだが、私の知っとる焼畑とはちがうなあ。ここらでは昔、田んぼの廻りのカヤバシ⁴を焼いてカブラやらをつくっていましたわ」と昔のことを話してくれた。ある時、宮崎県椎葉村で現在も続けられている焼畑を扱った番組がNHKで放送された。在所の方々もその番組を観たらしく、何気ない会話の中で焼畑のことが話題になったことがある。また、我々が中河内に拓いた焼畑は国道から一望できる斜面にあるのだが、この国道を通った山内氏が「今年の出来はもうひとつですな」とおっしゃったこともある。さらには、後日聞いたところによると、営農組合長は2011年の秋口に自分の水田の畦斜面を焼いてカブラを作られたのだという。稲刈りを終えてから火入れと播種をおこない、この地域でのカブラづくりの農耕暦からはやや時期が遅かったためか、カブラは小振りのものになってしまったという。けれども、火入れによるカブラづくりを在所で実際に試みたということは大きな驚きであった。このように、在所の方々は我々が在所の外で取り組んでいる焼畑にまったく関心がないわけではなく、立場を違えながら気にかけてくださっているように思えるのである。このように、少しずつ新しいことが動き出しているような印象を受ける。

そのような中で、忘れられないことがある。稲刈りの最中の小休憩の折、畦に佇みながら、山内氏がこう話してくれたことがある。「増田さんや鈴木さんが来て、何か新しいことが始まりそうな気がするんや」。我々が摺墨に関わりはじめて、これまでのところ何かが具体的にかたちとなったわけではない。けれども、我々が通うことで、在所に多少とも新しい気運をもたらしているのかもしれない。

おわりに

ここまで摺墨という在所と私の関わりを述べてきた。そこで示してきたように、摺墨での取り組みは、地域を活性化するという漠然とした目標はもっているものの、明確かつ具体的な計画や枠組みをもって始まったわけではない。こうした展開は、良くいえば在所の一部の方々と議論しながら取り組みを作り上げるかたちであるといえるが、悪くいえば行き当たりばったりの取り組みともいえる。

一方、中河内や赤子山での取り組みは、焼畑という明確な枠組みがある。そこでは、我々が焼畑を実施するための具体的な計画を立て、それを地域で実現させてもらう中で、地域の方々と関わっていくというかたちである。もちろん、それは地域の理解と協力があってこそ実現できるものであるが、そこでのプロセスは、外部者である我々がまずは地域の人びとに取り組みの目的や内容などを示して、地域の側の関心や協力を引き寄せる働きかけを起こすから始まる。たとえば、中河内では2010年より朽木FSが主体となつての焼畑を始めた。そして、永井氏の仲介・調整のもとで、火入れ時には在所の方々を中心とする地域の方々にも参加・協力いただき、収穫時には在所の集会所で食事を囲みながら談話した。このような関わりはこれまで2回おこなってきた。そこでは、当然のように思われるかもしれないが、

⁴ 山裾に広がるカヤの群生地。農地あるいは林地の端に位置することから、この名が付けられたのであろう。

1年目よりも2年目の方が、地域の方々はより協力的、かつ、より打ち解けてくださっているように思われ、地域の方々との距離感がしだいに縮まってきているように感じられる。このように、我々が一つのヴィジョンを示す中で地域の方々が徐々に近づいてくるパターンもありうるものであり、それも外部者が地域にアプローチする一つのやり方であろう。それでは、摺墨での取り組みのように、外部者が思いがけないかたちである地域社会と出会い、そこに明確で具体的な計画もないままに関わっていくあり方は、外部者自身にとって、そして、その当該社会の人びとにとっても、どのような意味をもつのだろうか。

摺墨での関わりは、焼畑のプロジェクトと平行しながら、我々にとって思いもかけないかたちで展開してきた。当初、私は調査や研究を第一の目的として、摺墨を訪れたわけではなかった。私が摺墨に何度も足を運ぶようになったのは、在所から宿題のようなものを与えられ、それに応えようとするためであった。しかしながら、それは義務感からではなかった。また、2011年9月には台風の影響で稲刈りが大幅に乱れたが、その際に毎週のように在所に通ったことも、在所を支援しようという義侠心からではなかった。私が在所への訪問を重ねるようになったのは、その度ごとに在所の姿が少しずつ見えるようになってきたことが大きい。それは自らが関わった稲やソバの生長の様子だけでなく、在所を取り巻く社会変化の中で自律的に対処する人々の姿であった。こうした在所の生きた様子に次第に心惹かれるようになってきたのである。

このように私の中で変化が生まれていた。この変化は研究者としての私が興味深いトピックを発見したにすぎないかもしれない。しかし、今のところ、私は在所の訪問を調査として位置づけておらず、関連するトピックについて集中的・体系的に調べているわけではない。また、私の変化はあくまで個人レベルのできごとにすぎないと評されるかもしれない。けれども、私が在所に何度も通うようになったのは、在所の方々にも変化が見られるようになったと感じ取れるからである。そうした先方からの反応があると、それまでの私の関わりがけっして一方通行のものではないことを感じ、安堵感のようなものを覚える。そしてそれは、進度の差はあれ、一つの課題に向かって手探りで模索しながら、在所の方々と同じ場や時間を多少とも共有しているという感覚でもある。このように、私の変化は私の内部での一方的な変化ではなく、先方からの反応や働きかけによってさらに促されたものであり、両者の相互的な関わりの中から生み出されてきたものであるといえる。

本稿では述べなかったが、じつは私は在所では何度も失敗を重ねている。たとえば農作業の手順や仕方であったり、神事でのふるまいや在所でのつきあいにおける作法に関することであったり、ある時には、酩酊したまま夜道を歩いて小橋から落ちて負傷したりと、さまざまなことをしでかした⁵。そのたびに私は自分の未熟さを痛感し、在所のつきあいや行事に参加させていただく時には未だに緊張を覚える。ただ、こうした私の失敗は時として笑い話の種となることもあり、こうしたことは在所との関わりを深めていることの証かもしれない、と前向きに考えるようにしている。また、土日は農作業やニンソクで忙しく、自分のことだけで精一杯であるということを聞いてから、新たなことを提案するのを躊躇してしまうようになっているが、それゆえに先方から何か新しいことへの関心や反応が感じられた時の喜びは大きい。このように、在所の方々にも、そして、外部者の私にも、それぞれの中に何がしかの変化が生まれ、個々の変化が相互に結びついていると思える時、外部者は地域というまとまりの中に「ともにある」という感覚を受け取ることができる。だからこそ、私は懲りもせず何度となく在所に足を運ぶのであろう。

⁵ 在所でのつきあいで考えさせられたことについては、増田[2012]を参照。

ある時、3人組の一人が、役所が地域活性化を目的に企画する事業に関連して、こう話された。「わしは思うんや。1回きりのイベントは意味がない。何か、継続していかないと」。そうしたことを伺う中で、私は次のようなことを考えるようになってきている。それは、在所の人びとが我々に期待しているのは、問題を即座に解決する方法やそれがもたらす成果であるのはもちろんであるが、ともに答えを模索する過程にもあるのではないか、ということである。地域づくりや活性化がおいそれと進むものではないことは、在所の人々の方が外部者よりも十分に身にしみて実感されてきたことであろう。むしろ外部の者が在所に出かけ、在所について一緒に考え、新しい動きを始める。たとえ、それが遅々たる歩みであれ、関わりが長く持続し、その展開過程そのものが活気となることを期待しているのかもしれない。そうであれば、そこで展開することというのは、明確な計画や手筈あるいは特定者によるリーダーシップに沿って導きだされるものというよりも、地域（あるいは地域に暮らす個々の方々）と外部者のそれぞれの思いが絡まり、そこから紡ぎだされながら生み出されるようなものなのかもしれない。

本プロジェクトの代表である安藤和雄氏が実践型地域研究を提唱する中で重視するのは、研究者自らが地域という場に身を置く過程で、直感的あるいは本能的に意識された諸問題に当事者として向き合い、その克服や解決に関わるという研究者のスタンスであり[安藤 2010]、そこでは当該地域の内部で解決が望まれることがらを課題として設定し、その課題の性格に適したアプローチを開発していくという課題先行的アプローチが適しているとされる[安藤 2011]。しかし、外部者が地域に赴き、当地の諸問題を自身の問題として受け取るというのはそうそう容易ではない。研究者と地域との関わりのうち、学術的な目的を第一義としない取り組みを広い意味での「実践」とするなら、この集落に通う私の関わりも実践の一つであろう。私が当該集落に通うのは、そこに対する思いが生まれてきたからであるが、あくまでそれは興味や関心という段階にある。そこでの私の課題は、相変わらず漠然としたままであり、その解決に向けた切り口を模索している状況にある。そのため、私は必ずしも安藤氏の想定するような地平に立っているわけではない。

外部者である私にとって、地域の抱える問題を当事者のように捉えることは、まだまだほど遠い段階にある。それでも、特定の地域との関わりが増す中で、当地への思いが生まれ、次第にそれが高まる中で、地域の人々の問題意識と外部者の思いが近づくことはありうるであろう。そのためにも、とにかく現地に通り、少しでも多くの時間や場を地域の方々と共有する。そのようなきわめてシンプルなことを、まずは愚直に続けることに尽きるのであろう。そう自らに言い聞かせながら、今後も在所とのつきあいを深めていきたい。

謝辞

一連の取り組みは地域の方々の理解と協力なしには実現できなかったことであり、とりわけ滋賀県長浜市余呉町の摺墨、中河内、菅並の各集落、「ウッディパル余呉」（赤子山）のスタッフの方々には大きく支えていただいた。とりわけ、摺墨集落の方々には訪問の度にたいへんお世話になってきた。また、本稿を執筆するにあたり、摺墨集落の3人組からは表記や内容について修正すべき点をご指摘いただくとともに、「評論家のような文章はええから、もっと何かやらんと面白くないやろ」とのコメントを受け、今後のことに頭を捻らせているところである。この場を借りて感謝申し上げます。

参考文献

安藤和雄 2010 「実践型地域研究に関する覚書」 鈴木玲治（編）『実践型地域研究中間報告書 ざいちのち』京都大学生存基盤研究ユニット・東南アジア研究所：1-5

——— 2011 「地域研究における実践の意義——課題先行的アプローチを手がかりに——」『実践型地域研究ニュー

ーズレター ざいちのち』38 京都大学学際融合教育研究推進センター生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所: 4

川喜田二郎 1967『発想法』中央公論新社

小牧実繁；宮畑巳年生 1957「近江盆地周縁山村の研究：丹生谷の場合」『滋賀大学学芸学部紀要』7: 154-166

増田和也 2010「地域と関わるということ」鈴木玲治（編）『実践型地域研究中間報告書 ざいちのち』京都大学生存基盤研究ユニット・東南アジア研究所: 33-39

——— 2012「在所におけるつきあい方から教わったこと」『実践型地域研究ニューズレター ざいちのち』41 京都大学学際融合教育研究推進センター生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所: 1

末原達郎 2011「生業としての日本農業と集落営農という装置」松井健；名和克郎；野林厚志（編）『グローバリゼーションとく生きる世界——生業からみた文化人類学的現在』昭和堂: 209-247

余呉町教育委員会；建設省高時川ダム工事事務所（編）1991『高時川ダム建設地域 民俗文化財調査報告書』

（写真撮影：写真1-6、8 増田和也、写真7 島上宗子）